「お母さんたちの涙に、あなたは何を思いますか？」へのコメント

「お母さんたちの涙に、あなたは何を思いますか？」の記事を目にして下さった方から、早速コメントをいただきました。

参考までに、ご覧下さい。

２００６．７．２３．阿部幸泰

①「母親たちの涙に、あなたは何を思いますか」読みました。

読んでの思ったコトは母親たちは強いということです。

きっと、理解者も少ない、支えとなるものもないに等しい中で不安でどうしようもなくて泣きたいくらいの気持ちを抑えて毎日子どもの世話をしていて、阿部先生がどのような話しをしたかはわかりませんが先生の話しを聞いて、理解してくれている人がいるという安心感、自分が抱えていた不安の軽減で今まで泣くまいと張りつめていた糸が切れて泣いてしまったんではないかと思います。

強くもあり脆くもある、だからこそ理解者・支えが必要なのだと思います。

母親たちが抱いている社会への不満は数知れないと思います。

福祉と騒がれている世の中にも関わらず福祉に対して関心を持つ人はまだまだ少ないし、障害者に対しても偏見を持つ人も少なくない、施設だってまだまだ少ないし、金銭面での援助等の問題、そういった不満を簡単になくすことはできないけど、自分にできるコトを探して完璧とまではいかないけど理解者になれたらいいと思います。

もっともっと世間が福祉のほうに目を向けるようになんらかの努力も必要だと思いました。

うまく文章になってない部分もあるかと思います。すみません。

②ＨＰ記事を読ませて頂いて、メールを送られたお母さんのお気持ちを通じて、妻が明石さんの講演会に参加した時の事を思い出しました。

当時は、心の中に日々の想いを抱えこんでしまい、でもそれを心に秘めて、頭で無理にでも前向きにと、思い込まねばという苦しさで心が揺れていた頃でした。

明石さんとの出会いで、抱え込んでいた気持ちを委ねられる理解者に出会えた事が、す

ごく嬉しく、支えになったと話しておりました。

そういう意味で、明石さんのお話されている本人を支える家族の背景を理解したいと寄り添って下さる方との出会いが、どれだけ励みと支えになるか、そして次のステップに繋げるための大きな一歩になるのを、私達も実感しています。

そしてＨＰでお話下さっている事、福祉を専門職として携わっておられる方への強いメッセージとも感じましたが、当事者、家族に寄り添う事への想いが、とても有難く、その想いに触れ自分も前向きに出来る事をしたい、人との繋がりの素敵な面を改めて教わり、励みにする事が出来ました。

メールを送ってこられたお母さんが、これからも係わり合いを育んで下されば嬉しいなと思います。

③私は、明石さんの言葉（阿部さんがＨＰに載せたコメントの最後で紹介している言葉）を反芻しています。

④ HP、読ませていただきました。

中学からの活動がご縁で、ある身体障害を持つ方のお母さんと知り合いですが、端から見ていて、明るく振る舞っていて、そんなふうには見えませんでした。

しかし、先生の記事を読んで、やはりストレスを抱えてらっしゃるのだなと思いました。

ストレスの一部は、社会の在り方や私たちの考え方にもあるのではないかと考えさせられました。

厚かましいかもしれませんが、何かできないか、とそう思いました。

保育士になってから、どう寄り添えばいいのか、じっくりと考えてみます。

⑤涙を流されたお母様、添ってくださる嬉しさに触れたんでしょうね。

⑥ＨＰ，見ました。

まだまだ、たくさんの人が助けを待っていることを感じました。

こういったお母さんへの支援も含めて、認定こども園が果たす役割になれれば・・・と思います。

まだまだ、泣きたくなる世の中なんですよね。わかってはいますが・・・・・。

⑦親とどう係わり、親をどう育てるかということは、我々自身がどう生きるのかと問われているのと一緒ですね。

⑧「お母さんの涙にあなたは何を思いますか」を読んで、日頃のお母さんの子育ての大変さ、辛さ、障害児の母親ゆえのストレスなどを想像して考えることができました。

私がもしお母さんの立場だったならば、たぶん自分の言いたいことを阿部先生がおっしゃってくれたことが嬉しくて、私も涙してしまうような気がします。

いくら特別支援教育と騒がれていても、まだまだなのが現状であり、お母さん達の現状が良くなってきているとはあまり感じられないからです。少しでも一人でも自分の気持ちをわかってくれる人がいると思えることが、自分への励みになり、支えになり、頑張る勇気をもらえるのではないでしょうか。

先生はよき理解者であり、貴重な存在だと思います。

先生のホームページはいつも考えるということを教えてくれますね。

⑨僕は数回だけですが親御さんの涙に遭遇したことがあります.

そこには僕が思い及ばないようなさまざまな背景や心理があるのだと思います.

とても「共感」するにはいたらないかもしれませんが，こちらはそのことを少しでも理解したいと思っていることを伝えることが大事でしょうし，また，それはたやすいことではないことをいつも思います.

「本当にその人のことを想っている」ということは，言葉のうえだけのことではなく，その人の生き方そのものなのだ,ということをつい先日の検討会でもつくづく考えました.

西多賀に初めて行ったとき，阿部さんに言われた言葉は「思想は行動である」でした.

僕はいつもこのことを考えます．このことを自分が間違いなく確実に実践しているとはとてもいえないことは十分承知していますが，それにしても僕が見ていて「そう言うならふつうそんな風には行動しないだろ」と言いたくなってしまう 人がじつに多いと思ってしまうこの頃です.

⑩聴講いただいた、他のある母親のＨＰから転記。

【　去る 7 月 15 日、私が役員を務めるＮＰＯ石巻広域アドベンチャークラブの特別支援教育講座　第 3 回講義が開催されました。

今回の講師は　デクノボー先生(もちろんハンドルネームですよ♪)

デクノボー先生は、主に重心障害児者を支援なさっている方で、某大学や福祉系専門学校のの非常勤講師であり、障害児者支援団体の顧問を務めていらっしゃる、大変多忙な方です。

私は初めてお会いしたにもかかわらず、その気さくなお人柄と、何より、時々聞かれる「関西弁」に、勝手に親近感を覚えてしまいました♪(私は四国出身者！)

さらに、今回の講話は、まさに「そうだよな～！！」と思うことがたくさんあって。

うまく伝えられるかわからないけれど、ぜひみんなにも聞いて欲しい！ので、記事にいたします。

※私なりの解釈が加わっています。その点をご理解ください(_ _(--;(_ _(--;ﾍﾟｺﾍﾟｺ

『人間、社会、そして障害者とはー親に向けての支援のあり方を通してー』と題された今回の講話は、教員はじめ、教育関係者を対象としたものですが、私のような障害児の保護者も多数参加しておりました

まず、①障害者の自己決定権と支援の関係について

障害が重ければ重いほど、支援の量は増える。

それに伴い、障害者の自主性・自己決定権が少なくなる現実のお話。

自主性の主体性を考えると、YES　OR　NO　のような二者択一の選択肢では主体性は育たない。

３つ以上の選択肢があって初めて、「比較」が始まり、主体性が育つ。

これは、自分で決めさせる、意志表示をする、を目的とした指導を行う場合に、「やりますか？」「やりませんか？」と言うような「YES」「NO」を問うたり、「Ａ」「Ｂ」どちらが良いですか？と言うように「二つのうちの一つ」を選ばせるのでは、「どちらも好きじゃないけれど、Ａは嫌だから、Ｂにしておこう」と思ってＢを選んだ場合、Ｂが好きだから選んだと言うわけでは無いのに、この子は「Ｂが好き」などと言った誤解を生む。

３つ以上の選択肢があって、初めて子どもは「比較」することを始める。そして自己決定する。

自主的に選ぶと言う場面が生まれる。

そうだよな。どんな場面でも「行くか、行かないか」とか、「食べる？食べない？」なんて聞くことが多いよな。と思ってしまった。

食べないからきっと、おなかが空いてないんだわ、とか勝手に思ってました。

でも、そうじゃないよね。おなかは空いているけれど、それは嫌いなものだから食べたくない。

それしかないんなら、いらない。そんな気持ちだってあるよな。

「どれにする？」と言った聞き方をしてやらなければならないな。と思いました。

次に②障害児を持つ親の受容能力への心情の層過程模式図　について

これは資料に、Ⅰ・ショックの時期　Ⅱ・否認の時期　Ⅲ・悲しみと怒りの時期　Ⅳ・適応の時期　Ⅴ・再起の時期　等の親の気持ちの移り変わりの図式が描かれていました。

しかし、お話の内容は、その図式にそってどうとか、こうとかと言うことではなく、『親の気持ちは、こんな風に階段を上るようにうまくは行かない!!』と言うものでした。

親の気持ちは「行きつ戻りつ」の繰り返し。「もう大丈夫」なんて言葉は無い！それが人間なんだ！と。

そのゆらゆら揺れる親の気持ちに寄り添い、付き合ってこそプロの教師だと！

親が育たないと子どもは育たない。

学校内で机に向かって一生懸命勉強する子どもたちの後ろに、常に親が存在していると言うことを忘れないで欲しいとお話されました。

学校は『子どもの教育権を守る』これは、当たり前の基本。

例えば､毎日の送迎を行っている親が具合が悪い､都合が悪い時に学校はどうしますか？「〇〇君はお休みです」などと言う馬鹿な話は考えられない。

誰のための教育権なのか。学校は親のために存在するんじゃない！とお話されました！

「親がうるさいから、とりあえず。。。」と言うような考えではいずれ元に戻ってしまう。

学校全体、教師全体の意識のレベルアップが必要なのではないか、とも。

教育を受ける権利は障害の有無にかかわらず、誰にでもある権利。

私たち親は、間違っても「学校と保育所」を同じに考えてはいけない。
学校は教育を受ける場所である。しかし、特別な配慮が必要とされるわが子達をお預けするにはそれなりの覚悟も必要なのだ。
ああしてください、こうしてください。と言い過ぎる親がいるのも事実。

私だって、言葉を持たないＫを手元から離す時間を不安の中で過ごしている。
だから、先生には「Ｋの身になって考えてください」とお伝えしている。
しかし、残念ながら、親と先生との間に「言葉の壁」が存在するのも現実なのだ。
そして、③コミュニケーションの背景について
ＡさんとＢさんの関係
ＡさんにはＡさんの辿って生きてきた「過去」があり、Ａさんの考える「未来」がある。
ＢさんにもＢさんの辿って生きてきた「過去」があり、Ｂさんの考える「未来」がある。
それぞれが、よりよい未来を想像し、それに向かって一生懸命頑張っている現在がある。
Ａさんの考える『思い』とＢさんの考える『思い』が同じ場合であっても、すれ違うことはある。過去が違う人間同士、同じ言葉を使っても「意味」（背景）が違う場合がある。というお話。

例えば「がんばって！」の一言。
普通に、人並みに頑張ってきたＡさんが、死ぬほど頑張ってきたＢさんに「頑張って」と声をかけた場合、Ｂさんにとっての「頑張って」は励ましにはならない。なるほど。。。
そりゃそうだ！と思ったね。

私だって、どん底に落ち込んでる時に「頑張って！」と言われるより「休んで良いよ」と言われたほうがずっと楽だった経験もある。
もうちょっと頑張らなくちゃいけないな、でもなんか気が向かないな、なんて思ってる時に「頑張らなくちゃダメだよ！」ってカツ入れてもらうと「おっしゃ～～！！」って思

ったりする。
　その時の状況によっても受け取る側の意識は変わる。

　デクノボー先生は
　たとえば、学校と保護者との間にすれ違いが生じる場合も多い。
　そんなとき、「話せばわかる」というものではないとお話された。
　しかし、「話さなければわからない」とも。
　「より、多く対話することで、言葉の意味の違いを埋めていくことが大切。
　努力すれば理解してもらえるではなく、相手からの情報発信を受けた時、かかわりあい、育ちあい、コミュニケーションがうまれる」と。

　何度話してもわかってもらえないとき、私は「もう、いや！話したって時間の無駄！」とよく思う。
　そこで話し合い事を止めてしまい、諦める。
　でも、本当に子どものことを考えたら、あきらめてしまってはダメなんだなと思いました。

　話し合い、理解しあう。これって、話せばわかる、お互いを認め合えばよりよい関係が築ける、なんて簡単なものじゃなく、時間と忍耐力が必要なのかもしれない。
　でも、自分の想像する「子どもの将来像」にはたくさんの理解のある支援者に囲まれ、笑って生活する光景ははずせない。Kには何歳になっても笑っていて欲しいもの。
　その光景を現実にするためには、対話を持って溝を埋めていくしかないんじゃないかって思った。

　④支援者とは
　これは、教員に向けて・・・自分のかかわった子どもたちが、学校を卒業した後、どのような生活を送っているのか見て欲しい。
　その姿を見て、自分は、学校は子どもに何をしてきたのか振り返って欲しい。
　自分がアドバイスしたことが、子どもにとって、親にとってどういう効果があるのか、自らを検証する勇気を持って欲しい。

そして、自分の知識と技術を今後、いかに働かせることが出来るかというチャレンジ精神を持って欲しい。

『与えられる知識は応用が効かない、求める知識は知恵となる』の言葉をいただきました。

そして保護者に向けて・・・子どもは親の所有物ではない。

子どもは親が亡くなっても生きていかなければならない。

ひとりで生きていくスキルを身に付けられるような知識が必要。

子どもの将来を悲観して、勝手に命を絶つようなエネルギーは、子どもが安心して暮らせるような社会を作る方向へベクトルを変えて欲しい、と。

今年に入ってから、県内でも数件、悲劇的な事件が起こっています。

障害のある子どもの将来を悲観して、親子で。。。なんて耳をふさぎたくなるような事件が。

確かに、Ｋは私の子どもだけれど、Ｋの未来は私のものじゃない。私の思うように動かしてはいけない。

だったら、Ｋが自分で好きなものを選び、やりたいことが一つでも叶うような環境を、社会を私は整えてやらなくちゃ！と思いました。

親は、子どもの第１のサポーターである。子ども自身が自分の気持ちや意見を上手に表現できれば、そりゃ、それが一番良い。しかし、残念だけれどもそれが出来ないのが障害。先生方と親は、平面(フラット)な位置で対話することが大切。

決して、親がうるさいから、とか思わないで欲しい。と私は思った。

親は、子どものこと、心配で心配でたまらないんです。

学校でどんなことがあったと話せない我が子が、学校から帰ってきても落ち着かずにイライラしていたら、「何があったのかな？」と思うのは当たり前。

先生からの報告は大切だしありがたい。

でも、悲しいかな先生のお話の中に「あれ？」と思う事だってあるんです。

親は決して「親にしかわからないのよ！」なんて思ってない。

先生に言われて気づく事だってたくさんあるよ！

本当に大切なもの＝子どもの身になればわかる！

このことをいつも胸において置いて欲しいだけなんです。

決して、先生の評価じゃなくて、周りにどう思われるかじゃなくて。

子ども自身が心の底から笑顔で過ごせているか？ってことを。　】